

PREFACE

はじめに

盛岡から東京に戻って6年が過ぎた。戻った年に岩手医科大学在職中に書きまとめた原稿を『よい義歯 だめな義歯』との表題でクインテッセンス出版から出版した。幸い多くの先生方の支持をえて、現在5刷まで増刷を重ねている。

さて、この6年間で我が国の歯科医療を取り巻く環境は厳しさを増した。高齢化はさらに進み、高齢化率は昨年27%を超え、認知症患者の増加も深刻な問題となってきた。個人だけでは高齢者を支えきれないことから、「地域包括ケアシステム」の構築が提言され、地域全体で住まい、医療、介護、生活支援・介護予防を“包括的に”体制を整備しようとする取り組みがスタートした。また「オーラルフレイル」いう新たな考え方が生まれ、口腔機能の維持、改善という観点からの重要性が認識されるようになってきた。

総義歯を必要とする患者は、まさにこの「地域包括ケアシステム」で支援されるべき対象者であり、「オーラルフレイル」が懸念される高齢者である。したがって総義歯治療の目標は、間断のない食べる機能の維持、回復であるとの再認識が大切となった。しかし、未だに歯科雑誌にはセラミストまがいの歯肉部がモディファイされた症例写真が度々掲載されており、違和感を覚える。今、治療のファーストチョイスは新義歯製作よりも、慣れ親しんだ使用中義歯の修理やリラインに移りつつあり、訪問診療などを考えれば、マル模だけでほほどの義歯を作れる技量も求められている。

そこで、本書では予備印象採得とリラインを主要なテーマに掲げた。しかし、これらをマスターするためには、たとえ回り道であろうとも、口腔の解剖学的、生理学的知識および理工学的知識を整理し、それらに基づいた義歯のあるべき形の理解が必須である。そのためには、意外に思うかも知れないが、辺縁形成のステップを通じて考えることが一番の近道であると確信し

ている。コンパウンド印象の項は、コンパウンド印象を推奨するために書いたわけではない。読むことによる“辺縁形成の仮想体験”を通して、義歯の形態、印象採得の本質を理解してほしいとの意図からである。まずPart 2を読んだから、Part 1、Part 3と読み進めるとすんなりと体になじむと思う。また、シングルデンチャーについては、本書題名の“マスター1”から続く、次作への序章とお取りいただきたい。

さて、今回も港区の磯谷一宏先生に題名を考えていただいた。鈴木、担当編集者であるインターアクション（株）の畑、磯谷の『よい義歯 だめな義歯』チームに、新たに古屋純一教授を加えての執筆再開である。

また、本書をまとめるにあたっては多くの先輩、友人にご助言、ご支援をいただいた。特に学生時代からの師であり、義歯を考える力を伝授していただいた富山県の田中慎二先生、私に診療の場を与え、様々な支援いただいている東京医科歯科大学の水口俊介教授に心から感謝を申しあげたい。また、常日頃から私を叱咤、応援してくれている同僚の高橋英和教授、長野県の竹内 智先生、世田谷区の安藤一夫先生、さいたま市の渡邊竜登美先生、渋谷区の大泉 誠先生に感謝する次第である。さらに、私の遅筆でご迷惑をおかけしたデンタルダイヤモンド社の濱野 優代表取締役にお礼を申しあげたい。

鈴木流のポイントは、頭を使うことにある。超絶な技ではなく、知識から生まれた知恵を使い、普通より少し技を頑張ることで、大きな結果が得られると理解している。本書が若い歯科医師の技量向上に少しでも役立つことができれば幸いである。

平成29年3月
鈴木哲也